

Slang 研究の一断面

(4) Hypocrisy (COD)

- 3) Argot=Jargon, slang, of a class, esp. of thieves. (COD)
- 4) lingo, flash, jargon, lingua franca, gibberish, Chinook, bêche-de-mer (beche-le-mer, beach-la-mar), pidgin (pigeon), etc.
- 5) 例えは humbug, crocodile tears の如きもの。何れも現在では普通語として扱われているが、もとは slang として俗語辞典に収録されている。
- 6) 例えは bamboozle (欺く) の如きは 18 世紀初頭の頃から用いられていて、しかも今なお slang としての取扱いを受けている。cf. NED. COD.
- 7) 例えは dice の代りに bones を用いるが如き。
- 8) 例えは to stump の如きがある。但し、この場合の stump は「選挙演説をして廻る」意。
- 9) ghost-writer (代作者); caterpillar (無限軌道車) の如きである。
- 10) bell-hop (ホテルのボーイ); sorehead (不平家); rubberneck (無暗に見聞したがる人); killjoy (興ざましな人や事物) など。
- 11) たとえば nifty (いきな, 気の利いた), oomph (sex appeal のこと), whoopee (飲めや歌への大騒ぎをすることを make whoopee と云ふ), などは COD にもあるが、その他 COD あたりには記されていない語も多い。
- 12) Cf. H. L. Mencken: The American Language, Supplement II, pp 644-5.
- 13) gipsy=Member of a wandering race (called by themselves *Romany*) of Hindu origin with dark skin and hair, living by basket-making, horse-dealing, fortune-telling &c., and speaking a much corrupted Hindi;……
[earlier *gipcyan* for *Egyptian*, the race being supposed to come from Egypt when it appeared in England in early 16th c.] (COD)
- 14) Cf. Mencken, op. cit. p. 653.
- 15) 乞食や盗賊仲間の隠語・符牒・合言葉。
- 16) Acheln (to eat); Barlen (to speak); Betzam (an egg);
Gfar (a village); Joham (wine); etc.
Cf. Mencken, op. cit., p. 654.
- 17) Cf. W. J. Burke; The Literature of Slang (1939). Mencken はこの年代を 1517 年としているが、その根拠は分らない。元来出版年代の記されていない書物である。
- 18) Robert de Balzac: Le chemin de l'ospital.
- 19) Cf. Mencken, op. cit. p. 655.
- 20) Cf. Burke, op. cit. p. 65.
- 21) 例えは Antidote (=A very homely woman); Cat (=A common whore); Chink (=Money); Stretching (=Hanging) の如きものである。Berrey and Van den Bark の辞書に採録されているものと、いないものを取りまぜて 71 語が、Mencken によって集録されている。
- 22) Mencken, op. cit. p. 660.
- 23) Mencken, op. cit. p. 661.
- 24) 新奇を排して自国語の純粋性を保持しようとする一派の人々を言う。純正論者。
- 25) 例えは crocodile tears, of easy virtue, pin-money 等。
- 26) "The Argot of the Underworld" (*American Speech*, Dec. 1931. pp. 99-118)

slang の中でも cant が進入して来たのである。更に、映画や劇場関係、その他からも新しい slang が盛に発生するのであって、これも細別すれば、様々な classes に分類が出来るであろう。

最初に一寸ふれておいたように slang は概して生命の短く、用いられる範囲の狭い、一時的流行語が多いから、わざわざ取上げて研究の対象とするのは、一面無意味なことのようにも考えられるけれども、少くとも現代米語に於てはこの slang の盛な生成発展によって、いわゆる米語なるものの独特の性格、即ちその鮮明な描写力、簡潔な表現、印象の強烈さ、等に大なる貢献がなされており、更には又、国民性に基いて米国独自の表現を生み出すという点でも、米語の確立に大なる役割を果しているものと考えられる。従って少くとも米語米文学の研究に関する限りに於ては、その slang の研究は、いわゆる米語研究の一分野として意義を有するものであろう。

最後に Argot の例を若干附記してこの稿を終ることとしよう。(括弧内は意味を標準英語で表わしたものである。)

- 1) I have just found a customer for the pay-off, well heeled.
(I have just found a person with plenty of money whom we can swindle.)
- 2) Let's go to the big store and line up the props and frame the lay out for the score.
(Let's go to the swindlers' headquarters and arrange to get the scenery used to set up an imitation broker's office and lay our plans for swindling him.)
- 3) We should be good for five or six x-rays and the nut will be only a few yards.
(We should be able to make fifty or sixty thousand dollars while our expenses will be only a few thousand dollars.)
- 4) We can line up four or five set-ups at a G apiece and use the big store's phone for relay on the doggies.
(We can hire four or five men to pose as broker's clerks for a thousand dollars apiece and use the headquarters phone to get true results on the horse races.)
(from D. W. Maurer's "The Argot of the Underworld," *American Speech*, Dec., 1931, pp. 100-101)

附記：これは本格的な研究論文ではなく、英語の slang 研究の手引ともなればと考えて 1951 年にものした旧稿に多少の筆を加えて、忽卒の間に編集者の求めに応じたものである。多く註を加えて出来るだけ正確を期すべく努力はしたが、何分にも主題そのものの持つ特殊性のため、直接古文献に徴することの出来なかつた部分も多いことをお断りして、読者の寛容を仰ぎたい。英国の slang という特殊な分野に対して、多少なりとも読者の注意と関心を惹くことが出来れば幸である。

- 註 1) Slang=(1) Words & phrases in common colloquial use, but generally considered in some or all of their senses to be outside of standard English.
(2) Words & phrases either entirely peculiar to or used in special senses by some class or profession, cant. (*racing, thieves', artistic, schoolboy, etc., ~*)
(COD)
- 2) Cant = (1) Peculiar language of class, profession, sect, etc., jargon.
(2) Temporary catchwords (esp. as adj., ~ *phrase* etc.)
(3) Words used for fashion without being meant, unreal use of words implying piety

単な Vocabulary を附している。彼の採集した言葉の中で B. E. や Grose に採入れられているものも少ない。

以上述べて来たように、十七世紀にはじまった英国の浮浪者や盗賊の言葉の研究は十八世紀に及んでいるが、それに就いての研究書目は Burke の *Literature of Slang* (New York, 1939) に尽されている。更にそれ等に就いての論議は Gertrude E. Noyes の “The Development of Cant Lexicography in England, 1566—1765” (*Studies in Philology* [Chapel Hill, N. C.] Vol. XXXVIII, 1941, pp. 462-72) に見られる。又 Grose 以後も cant や slang に関する書物は多いが、近代になるまで概してあまり価値のあるものは少なかった。ところが近代になると、英国に於けるその方面の権威者である Eric Partridge が John Brophy と共に “Songs and Slang of the British Soldiers, 1914—1918” (London, 1931) を著しているし、又、彼自身の名著 “Slang, To-day and Yesterday, with a short historical sketch and vocabularies of English, American, and Australian Slang” (London, 1933) も上梓されて、この方面の研究に光明を投げかけている。又、アメリカに目を転じると Louisville 大学の Dr. David W. Maurer は “The Big Con” (Indianapolis, 1940) はじめ、多くの研究を発表して、その道の権威であり、最近数年間は大きな “Dictionary of American Criminal Argot” の編集に着手しているし、一方では Godfrey Irwin の “American Tramp and Underworld Slang” (London, 1931) も、前記 Partridge の論文を添えて出版されている。全体として Slang の参考文献に就いては大體 1922 年までのものなら Stanford 大学の Arthur G. Kennedy 博士の大著 “A Bibliography of Writings on the English Language from the Beginning of Printing to the End of 1922” (Cambridge and New Haven, 1927) によって知ることが出来るし、またそれ以後のものは前記 W. J. Burke の “Literature of Slang” (New York, 1939) によって分るのである。

扱て、以上述べたことを基盤として、American Slang を一瞥することにしよう。一世紀ばかり以前には American Slang の大部分は英国のそれと同じものか、或はそれに基いて作られたものであったけれども、今では米語全体が持つようになって来たその独自性が Slang の面に於ても現われて来ている。前述の Maurer によれば、American slang はその主な特徴として “its machine-gun staccato, its hard timbre, its rather grim humor, its remarkable compactness” を持っている。⁽²⁶⁾ 勿論それぞれの分野によって、用いられる slang の異なるのは当然であるけれども、大體に於てよく standardize されているらしく、米語の特徴の一つである国際性を発揮して外来の要素が多い。又、犯罪者は仲間同志の計画や相談を第三者に覺られぬために cant を用いるものであるが、又一方では、それを用いることによって group-solidarity 即ち camaraderie の感を強めるのにも役立てている。そして第三者に対して祕密を守るといふこととは一見矛盾するようであるが、普通人の前では cant を用いないのが常で、それは cant の使用によって他人の注意を惹くことを避けるためである。America では禁酒法が行われた為に犯罪が増加し、従ってかかる cant も激増した。又 cant と密接な関係のある一般

ここでは絶えず jargon に接したため、遂にこの辞書を作る気になったものと思われる。尤もこの辞書は前出の B. E. の New Dictionary に負うところが多く、この事に就いては Egan も Partridge も、ふれてはいないけれども事実であるとして Mencken が指摘している⁽²³⁾。しかし、B. E. のものをそのまま採入れたところも多いが、また多くの新しい記述も見られ、B. E. から不要と思われるものを除いた点で、ずっと新しい Slang dictionary になっていることも注目すべきであろう。第一次世界大戦中に Partridge がその slang の研究を始めるまでは Grose のこの辞書が、その方面での authority であった。

大体、描写力に富んだ新語を自由に創造使用することは十八世紀英語の一特色であったが、十八世紀前半になると、その傾向が次第に抑えられて、いわゆる purists⁽²⁴⁾ などという連中が勢力を得、新語製造の傾向は America へと移って行ったのである。しかし英国にも、その当時未だ記録に値する slang は多く存在していて、Grose はそれを熱心に集録した。第一版に於ける三千語余りは、第三版では殆ど四千語に近くなっているらしい。Mencken はその大著 “The American Language” の Supplement II の中で、Grose の採録した言葉を 27 語抜萃しているが、その中から更に比較的興味のある語を若干取上げて見ると次の如きものがある。

Blubber cheeks (=Large, flaccid cheeks)

Beau trap (=A loose stone in a pavement, under which water lodges, and on being trod upon, squirts up.)

Collar day (=Execution day)

Fish (=A seaman)

Hen-house (=A house where the woman rules)

Snip (=A tailor)

Traps (=Constables and thief-takers)

Book keeper (=One who never returns borrowed books)

Grose の記録した言葉の多くは今日迄生命を持続し、中には standard language となってしまうものもある⁽²⁵⁾。彼は 1785 年版の序文の中で、盗賊仲間の cant と、普通一般の slang とをはっきりと分けているそうであるけれども、この両者の区別は筆者がこの論文の最初の部分で述べたように、また J. C. Hotten も言っているように、明確に分類出来ないのが本当ではあるまいか。

cant の起源に就いて Grose の説の根拠となっているものは、London の牧師であった William Harrison (1534—93) という好古家が Raphael Holinshed (d. ? 1580) の有名な “Chronicles of England, Scotland and Ireland” (2 Vols., 1577—78) に附した “Description of England” という論文であるが、この論文中に、下層階級、浮浪者などの研究家として引用されている Thomas Harman という人がある。この人は “A Caveat or Warening For Common Cursetors Vulgarly Called Vagabondes” (London, 1567) の著者で、その伝記は審かてないが、浮浪者の多く徘徊する地域に住み、彼等の生活を研究してこれを詳細に叙述し、その巻末に簡

Terms Ancient and Modern of the Canting Crew, in its Several Tribes of Gipsies, Beggars, Thieves, Cheats, Etc., With an Addition of Some Proverbs, Phrases, Figurative Speeches, Etc. (London, 1698) である。著者は不明で、ただ B. E. とのみ記されている。これは後に出了 John S. Farmer の “Choice Reprints of Scarce Books and Unique Manuscripts” (London, 1899) の中に複写されており、その後も幾つかの複製本が出ていて、折々古本屋で見かけられるそうであるが、Burke によれば “……perhaps the most important dictionary of slang ever printed, since it had such an influence upon later compilations”⁽²⁰⁾ である。6 ページの序文に 176 ページ二段組の vocabulary がついている由。採録された語の中には今なお、多少とも用いられているものがあるが、最近に於ける、この方面の辞書として最も重要なものの一つである Lester V. Berrey と Melvin Van den Bark 共著の The American Thesaurus of Slang (New York, 1942)⁽²¹⁾ に採録されているものもある。

さて、この B. E. の辞書の後、殆ど一世紀というもの、英国ではこの種の本で重要なものは現れなかった。そして 1785 年に至って漸く Captain Francis Grose (? 1731—91) の “Classical Dictionary of the Vulgar Tongue” (London, 1785) が現れたのであるが、それ以来、この種の cant や slang に関するあらゆる述作はこれに基いていると言う。この辞書は 1788 年と 1796 年とに版を重ね、1811 年にはその第四版が Hewson Clarke という当時の筆耕者の手によって “Lexicon Balatronicum” となって現われている。(balatro は buffoon, jester の意のラテン語)。しかし 1823 年には、再び旧名に返って第五版が Pierce Egan (1772—1849) によって出版され、最後に Eric Partridge の手になる reprint が 1931 年、550 部の限定版として刊行された。これは 1796 年の第三版によったものであり、Grose 自身の手になる訂正や増補を含むもので、著者小伝の他に Partridge が多くの註釈を加えていて、その中には非常に貴重なものもあると Mencken は述べている。⁽²²⁾ Grose の父は 18 世紀の初め英国に渡来した Swiss の宝石商で、London で成功し、相当の財産を作った。Grose 自身は最初絵画と軍事に興味をもち、かなり長い間 Hampshire militia の副官及び主計をつとめていたが、又一方では 図案家及び水彩画家としても認められ、1766 年には The Incorporated Society of Artists の member にも選出されている位である。1769 年に父が死んでその遺産を継ぎ裕福な生活を送るようになると、専ら好古趣味に生きて “The Antiquities of England and Wales” 六巻を 1773—87 年に出版、更に “The Antiquities of Scotland” 二巻が彼の死ぬ時には完成していた。この Grose が、どうして slang に通じていたかという点、彼は一種の快樂主義者で、ロンドンの夜の生活を探求するのに、その余暇の大部分を費し、又、英国内の探険旅行も多く行ったからである。Scotland で Burns に出会ったのも、その旅行に於てであって、Burns の詩に “On Captain Grose’s Peregrinations Through Scotland”, “On Captain Francis Grose” その他が見られるのは、両者の交友を示すものであるし、又、あまりにも有名な彼の “Tam o’ Shanter” の詩が生れたのも、この Grose との交友が因をなしたものである。London の夜の探険に於ては Batch という男を伴として貧民街の St. Giles’s あたりに屢々出入もしたらしい。

ブライ語源である。

斯かる種類の言語に関する文献の最も古いものは Swiss の Basel に住んでいた John Knebel という牧師の原稿であるが、それが初めて本の形をとって現れたのは 1512 年 Augsburg で出版され、一躍有名になった “Liber Vagatorum” である。これは十六世紀の前半に於て多くの版を重ね、その中には 1528 年 Luther の手に成る Wittenberg 版もあるという。十六世紀の cant に関して英国人の書いたものは、すべてこの本に基いているらしい。しかし 1860 年になるまで、この本の英訳というものはなく、英訳が初めて現れたのは John Camden Hotten (1832—73) の “The Book of Vagabonds and Beggars, With a Vocabulary of Their Language” (London, 1860) であった。Hotten は London で出版業を営み、Dictionary of Modern Slang, Cant and Vulgar Words (1859) の著もある。彼によれば、中世に浮浪者の群が現れたのは, gipsy のためではなくて、托鉢僧が物貰いをして歩いた為であるという。

“Liber Vagatorum” には、当時のドイツに於ける浮浪者の類を 29 の主な種類に類別して、⁽¹⁵⁾ 彼等のいわゆる Rotwelsch 即ち cant を示しある。勿論何とも云えぬ奇妙な言葉ばかりであって、⁽¹⁶⁾ その語源は主としてドイツ語・ヘブライ語・ラテン語、そしてジプシーの言葉である。

それでは斯かる種類の言語に関して論及している英国の本で最も古いものは何かというと、それは Robert Copland の “The Hye Way to the Spittell Hous” である。出版されたのは恐らく 1535 年頃かと推定されるが、⁽¹⁷⁾ 決定的な年代は分っていない。London の St. Bartholomew's Hospital (1123 年創設の病院) の戸口に於ける、門番とこの本の著者との対話を韻文で書いた形式になっていて、その門番は浮浪者の cant を用い、全く cant のみで成立している章句もあるとのことである。しかしこれは前述の “Liber Vagatorum” によって書かれたものではないらしい。この本のもとになっているものは Sebastien Brant (1457—1521) という人の “Das Narrenschiff” (Basel, 1494) の⁽¹⁸⁾ 仏訳であって、これはその道の専門的論文ではないが、矢張り盗賊の Cant を含んでおり、国外で有名になった最初のドイツ語の作品であると云われている。⁽¹⁹⁾ Brant はラテン語の詩や、法学、また神学の本を著した人であるけれども、今では専らこの “Das Narrenschiff” によって記憶されている。本来この本は、その当時の上中流階級の愚行や欠点を嘲ったもので、それに附記された盗賊や浮浪者に関する記述は、前記 “Liber Vagatorum” の源になったと考えられる Basel に於ける裁判の記録と同じものであるらしい。この本を非常に自由に英訳して、それに純粹な英国の資料を付け加え、原著者の classical pedantry を除去して出来たものが Alexander Barclay の “The Shyp of Foles of the World (1508) である。“Das Narrenschiff” と同様、この本も大に成功した出版物であって、今なお学者の間で珍重されている。

Copland の “The Hye Way to the Spittell Hous” に続いて多くの本が出た。何れも英国の criminal cant に関するものである。そして、それ等の本の著者の中には Thomas Dekker (? 1570—1632, British dramatist) や Robert Greene (? 1560—92, British poet) 等の名も見える。しかし、正式に glossary の形式をとった最初のもは “A New Dictionary of the

であるかということは、これ等のものの中に、恰も米語と英語との間に於けるが如く、絶えず交流が行われていることからしても、中々断定し難い場合の多いのは言うまでもない。むしろ殆どの場合、その各々が、他のものの性格を幾分なりとも含んでいると言ってよいであろう。兎に角 slang は、次々と新に製造されて、それが極めて小範囲の使用に止まることもあれば、かなり広く用いられることもあり、時間的に見ても、極めて生命の長いものもあれば、短いものもある。そして、生命を持続しているうちに自ら正統語(法)の中へ昇格し、定着してしまうものもあるか⁽⁵⁾と思うと、又、何時まで生存しても slang としてしか認められず、standard English の中へ入って行くことのないものもある⁽⁶⁾。その発展過程から見ても、比較的社会の上層に発して一般に及ぶ場合⁽⁷⁾、又、その逆の場合⁽⁸⁾、など様々である。

ある一つの slang が比較的永い生命を保つ場合、その理由の第一として、その slang が一般民衆の必要を充す程度の「高さ」ということが考えられる。つまり、その slang が新に生じた、若しくは急に着目されてきた事物または観念の表現である場合⁽⁹⁾は勿論、そうでなくても、それが従来のものに比べて非常に適切な、気の利いた表現である場合⁽¹⁰⁾、それは新しい slang として相当の人気を得ることが出来、従って、その事物や観念の存続する限り、その slang の生命も永いというわけである。ところがその反面、単に発音上の戯れに過ぎないようなものもあり⁽¹¹⁾、又、あまり気の利いた表現でもないものの場合には、自然一般民衆に飽きられることも早く、従ってその生命も短い。一般原則としては、急に流行り出して大に人気を得たような言葉は消えることも早く、これに反して人気を得ることのおそかったものは割に永持ちがするという⁽¹²⁾ことである。

ここで目を転じて、slang と切っても切れぬ関係にある cant や argot の起源を一瞥しよう。犯罪者をも含めて、すべて一般に「いかがわしい人間」といわれるものの cant が西欧に於て多少なりとも、系統的に現れ始めたのは大体十五世紀の初期と思われる。その頃、東方から、色の黒いコソ泥の群、即ち、かの gipsy の連中が流れ込んで来て、土着の浮浪者・乞食・泥棒の類と入りまじったのである。彼等は最初エジプト人であると考えられていたから、英語では gipsy と呼ばれたが⁽¹³⁾、実際はインドの西北部から来たものであった。ドイツに入り込んで来たのが 1414 年、イタリアには 1422 年、フランスへ 1427 年、そして英国へやって来たのは十六世紀の初期、というように推定されている。そして彼等を迎えた土着の連中、即ち彼等と同様の種類に属する土着の連中は何であったかと言うに、托鉢僧の群(要するに乞食僧なのであるが)及び、土地を追われたユダヤ人の連中であつた。これ等二つの群が、新来の gipsy と言語の交流を行った結果、十五世紀の終り頃には既に多くのヘブライ語と gipsy の言葉(即ち、ひどい訛りの印度語の一種)との混入した、ドイツ語に基く一種の cant がドイツに於て発達していた。それ等のものの中、今日なお残存しているものの例として Mencken は pal(仲間)と ganov(盗賊)を挙げている⁽¹⁴⁾。pal は今日普通一般の語となっているし、ganov の方はこの儘の形では NED はじめ普通の辞典及び Slang の辞典にも採録されていないけれども、gonoph, gonov, gonof 等、様々の形で辞書に見られ、pal が gipsy 語源であるのに対し、これはヘ

Slang 研究の一断面

(An Aspect of the Study on English and American Slang)

石 田 英 二

(1)
Slang という言葉を英和辞典で調べると「俗語」と訳して、「国語で通俗に用いるがまだ正統語(法)と認められぬもの。屢々“ ”を附する」と註釈がつけてある。そして第二の説明としては「(或社会の) 通語, 用語; (盗賊等の) 隠語, 符牒, 合言葉; college slang 学生語」とあり, 更に第三の説明として「術語, 専門語; doctors' slang 医者用語」となっている。(岩崎民平: ポケット英和辞典, 研究社)。研究社版の新英和大辞典によっても大同小異であるが, 富山房の大英和辞典では「鄙語, 俚語」と訳してあり, 更にこれに二種類あることを示している。即ち

- a) 正統語法にて認めざる俗語,
- b) ある階級の人々の間にのみ用いられる俗語,

である。以上によっても分るように Slang とはいわゆる standard 即ちまともな語乃至語法ではない。

そして, 以上の説明にいま少し言葉を加えるならば, slang は通例, 時間的にも空間的にも甚だ限られた生命を有するものであると云うことが出来るだろう。かかる性質のもの, 即ち使用される範囲及び時間に於て相当に限定され, 一般に用いられる正統の言語としての地位を確立されていない言葉, を研究対象として取上げることの意義に関しては, 色々の意見もあることと思うが, ここでは, その問題は暫く措き, 英語及び米語に於ける slang の研究を一瞥してみようと思う。ここで米語という言葉を用いたが, これに就いても学者の間には意見が区々であって, 米語の独立性を認めない学者は米国英語という方を好むであろうけれど, 筆者は便宜上米語と言って, 英語と対立する名称を用いておく。尤も, これは American Slang の問題とも関連を有するものであって, 既に英語の一方言たるの域を脱した米語の性格というもの考える時, その重要な要素の一つとして slang の生成発展は目覚しく, 今や米語の一特徴となっていると言っても過言ではなからう。

さてここに厄介なことは, slang の定義であって, 最初に掲げた説明によっても分る通り, 広義に解釈すれば, この中にはいわゆる ⁽²⁾cant (隠語) や ⁽³⁾argot (主に盗賊仲間の隠語) その他, 様々の名称で呼ばれる多くの種類の言葉⁽⁴⁾が含まれるし, 又, 狭義にとれば単に一般的ではあるが標準語に入れぬ卑俗な口語ということにもなる。そして, ある一つの slang に就いて, それが純粹に狭義の slang としての範疇に属するものか, それとも cant 若しくは argot 等